杜甫「画馬讃」訳注

大橋賢一

解題

「画馬讃」は、杜甫と同時代の絵師、韓幹（？～七八〇。底本の注による）の馬の絵を褒め称えた文章である。制作年については、清・仇兆鰲『杜詩詳注』巻二四（以下『詳注』と略称）に「韓幹は、公の同時の人なり。此れ必ず天宝・乾元間の作なるべし」とあり、底本も従う。韓幹の詳細については、後述の「韓幹」の注を参照。韓幹の名は、杜甫「丹青引」（0768『詳注』巻一三。以下、杜甫の詩を引用するにあたり、『杜甫全詩訳注』(1)～(4)〈講談社学術文庫、二〇一六年〉の作品番号、及び『詳注』の巻数を記す）に、「弟子の韓幹　早に室に入り、亦た能く馬を画きて殊相（特殊な様相）を窮む」（傍点筆者、以下同じ）と、その名が記されている。「丹青引」は、優れた絵師の曹霸を褒め称えた詩であり、韓幹はその弟子であった。杜甫が先の句に続けて「幹は惟だ肉を画きて骨を画かず、驊騮をして気凋喪ならしむるに忍びんや」と、絵師としての韓幹を貶めた書き方をしているのは、この詩の原注に「曹霸将軍に贈る」とあるように、これが曹霸に対する贈詩であることによるだろう。実際、この「画馬讃」では、「丹青引」とは異なり、韓幹を絶賛している。

「讃」は、文体の名。なお銭本・謝本（校勘の対象とした諸本の略称については後述）が「贊」に作るように、両方の字は通じていると認められるが、「賛」に作るのが一般的なようである。南朝梁・劉勰『文心雕竜』頌賛篇に、

　賛は、明なり、助なり。……相如の筆を属るに至り、始めて荆軻を賛す。遷の史固の書に及び、賛に褒貶を托し、約文もて以て総録し、頌体もて以て論辞（論の筆法）す。又　紀伝の後評も亦た其の名を同じくす。

とある。劉勰によれば、賛は司馬相如「荆軻賛」を濫觴とする。ただ、この賛は現存しない。賛はもともと人を褒め

るための文体であったのが、『史記』『漢書』に至り褒貶共に記すこととなった。明・徐師曽『文体明弁』は、「賛」を雑賛・哀賛・史賛の三種に整理し、「雑賛」について、「一に曰く、雑賛。意は褒美を専らにし、諸集の載する所の人物・文章・書画の諸賛の若き、是なり」という。杜甫「画馬讃」は、韓幹、及びその馬の絵を褒めるものであるから、この雑賛に該当する。また明・呉訥『文章弁体』の「賛」は「大抵賛に二体有り。散文を作すが若きは、当に班氏の史評を祖とすべし。韻語を作すが若きは、当に東方朔画象賛を宗とすべし」と述べる。杜甫「画馬讃」は有韻であるから、後者に該当すると判断できる。呉納のいう「東方朔画象賛」とは、三国魏・夏侯湛「東方朔画賛」（『文選』巻四七）を指す。『文選』は同じく巻四七に、東晋・袁宏「三国名臣序賛」を収める。前者は前漢・東方朔の肖像画について書かれたもので、後者は三国時代の名臣二十人を取りあげ、彼らの生き方を称えたものである。

杜甫「画馬讃」は、画賛という点で「東方朔画賛」に連なるものと位置づけられる。ただ、「東方朔画賛」は、専ら東方朔の人柄を褒めることに終始しており、文章末尾に肖像画が置かれている場所に関する言及があるに過ぎず、絵画そのものに関する記述はほとんどない。杜甫「画馬讃」は、人物としての絵師・韓幹を褒めているという点で「東方朔画賛」を継承している。さらに、その絵画を褒めている点において「画賛」としての新たな「賛」という文体を発展させているとみなすことができよう。なお、現存する杜甫の賛はこの一篇に限られる。

訳注

底本・校勘・訳注の体裁については、谷口匡「杜甫『説旱』訳注」（『中国文化』第七六号、二〇一八年）に従う。底本には蕭滌非主編『杜甫全集校注』を用い、校勘・訳注には『宋本杜工部詩集』（略称「宋本」）、元・高崇蘭『集千家註批点杜工部文集』（略称「高本」）、清・銭謙益箋注『杜工部集』（略称「銭本」）、清・朱鶴齢輯注『杜工部文集』（略称「朱本」）、清・張溍『読書堂杜工部文集註解』（略称「張本」）、清・仇兆鰲『杜詩詳注』（略称「仇本」）、『全唐文』、謝思煒『杜甫集校注』（上海古籍出版社、二〇一五年）の諸本を参照した。また、校勘の対象として新たに宋・徐居仁『集千家注分類杜工部詩』（国会図書館所蔵本、略称「徐本」）を加えた。本文は原則として底本に従ったが、一部正字に改めたものがある。訓読・語釈では校勘を除き、新字体を用いた。

なお、本訳注は、筆者が、二〇一八年三月三日に杜甫散文研究会（於東京女子大学）で草稿を発表し、そこでの検討を経て修正を加えたものである。この讃は、以下に示すように三度換韻されている（『広韻』による。○◎は平声の韻字、●は去声の韻字を指す）。

㈠＝○神・新・身：上平一七真　○筋：上平二一欣

㈡＝●恣・地・躓：去声六至　●易：去声五寘

㈢＝◎媒：上平一五灰　◎哉・來・才：上平一六咍

換韻された箇所が段落の切れ目にもなっている。第一段落は複数の馬を描写する。第二段落は速く走ることのできる馬の姿を描く。第三段落は韓幹が馬の絵を描いた理由と絵の出来映えを賛美する。以下、三段に分けて訳注を記す。

〔一〕

韓幹畫馬、毫端有神。驊騮老大、騕褭清新。魚目瘦腦、龍文長身。雪垂白肉、風蹙蘭筋。

韓幹の画馬、毫端に神有り。驊騮は老大にして、騕褭は清新たり。魚目は瘦脳にして、龍文は長身なり。雪　白肉に垂れ、風　蘭筋を蹙ましむ。

韓幹が描いた馬、その筆先には神妙さがある。驊騮の年老いたさま、騕褭の清らかで若々しいさま。魚目のほっそりとした頭、龍文の長々とした胴体。白いもも肉は雪がしたたりおちたかのようであり、目の上の筋は風が吹き抜けたかのように引き締まっている。

韓幹　人名。その事跡については、晩唐・張彦遠『歴代名画記』巻九、並びに晩唐・朱景玄『唐朝名画録』に詳しい。また、晩唐・段成式『寺塔記』上にもその名がみえている。先に触れたように杜甫の詩には、複数その名がみえる。

韓幹の馬の絵としては「照夜白図」の模写（宋代）が現存しており、米国ニューヨークのメトロポリタン美術館にある。「照夜白」とは馬の名で、杜甫「韋諷録事宅観曹将軍画馬図歌」（0769『詳注』巻一三）に、「曾て先帝の照夜白を貌きしとき、龍池に十日霹靂（稲妻）飛ぶ」とみえる。「曹将軍」は先に触れたように曹霸のことで、韓幹の師にあたる。韓幹が「照夜白」を描いたことについては、張彦遠『歴代名画記』巻九に、「時主、芸を好み、韓君、間に生まれ、遂に命じて悉く其の駿を図せしむるは、則ち玉花驄、照夜白等有り」と記されて

いる。

馬の絵画と韓幹、及び曹霸に関連した事柄として、内藤湖南『支那絵画史』（六〇頁、ちくま学芸文庫、二〇〇二年）は次のように述べている。

又杜甫は曹霸といふ人を屢々褒めてゐる。しかし其の弟子韓幹は殊に有名である。曹・韓倶に人物をも画いた。杜甫は韓幹を稍貶（けな）している。即ち彼は「幹唯画肉不画骨。忍使驊騮氣凋喪。」と言つてゐるが、之によると曹霸は骨の高い馬を画き、韓幹は円く肥つてゐる馬を画いたことが知れる。しかし杜甫の批評には張彦遠なども不満であつて、反つて韓幹を揚げてゐる。蓋し当時馬の画は変化する時で、その変化が両者に現はれ、又当時馬に対する世人の好みも変つて来てゐて、それによつて子弟の画に相違があつたのであらう。曹霸は六朝以来の風に依つて画いたのである。……馬の絵も躍り跳ねてゐるやうなものばかりを画いて、馬のゆつたりした姿は画かなかつた。毛色なども一定したものを画いた。然るに玄宗は馬好きで、朝廷の厩には四十万匹を養ひ、それには特別に馬を監督する官を置いた。西域などでは毎年支那に馬を献じた。此等の馬は太平の徴しになるやうに育てたので、筋骨行歩の安徐なるものが尚（とうと）ばれ、毛色なども大分変つたといふことである。故に江都王でも韓幹でも、玄宗の意を受けて画いたが、江都王は古来の画風に従つて画き、韓幹は当時の好みによつて画き、写実風であつたのである。此事は張彦遠も蘇東坡も言つてゐる。かくて韓幹の絵は後代の手本になつた。

内藤湖南の指摘のとおり、模写の「照夜白図」から推すと、韓幹の絵の馬は確かに肥えた姿で描かれており、馬の筋肉が強調されていることがわかる。湖南の、杜甫が韓幹を批判しているという指摘は、張彦遠の「杜甫は豈に画を知るものならんや、徒だ幹の馬の肥大なるを以て、遂に肉を画くの誚（そし）りあり」（『歴代名画記』巻九）という発言を受けていよう。杜甫「丹青引」の韓幹に対する評語だけを引用し、杜甫の見方を批判したものとしては、晩唐・顧雲「蘇君庁観韓幹馬障歌」（『全唐詩』巻六三七）がある。この詩の冒頭には「杜甫の歌詩吟ずれども足らず、憐むべし曹霸丹青の曲。直だ言う弟子の韓幹の馬、画馬に骨無く但だ肉有るのみなるを。今日図を披きて筆跡を見れば、始めて知る甫もまた真に凡目なるを」と記されている。ただ、先に指摘したように、杜甫は本篇において韓幹並びにその馬の絵を称賛しており、

杜甫が絵画を理解していないという張彦遠や顧雲の指摘は妥当ではなかろう。興味深いのは二人が「丹青引」には着目しているのに対し、本篇は全く気にかけていないという点である。晩唐において、「丹青引」などの杜詩は通行していても、この「讃」はあまり着目されていなかったのかもしれない。

毫端　筆のほさき。筆端。また筆運び。筆づかい。杜甫「殿中楊監見示張旭草書図」（0929『詳注』巻一五）の末尾に「念う昔　毫端を揮いしを、独り酒徳を観るのみならず」と見えるように、書に対しても絵画に対しても用いられる。

有神　神妙さをもつ。杜甫「奉贈韋左丞丈二十二韻」（0035『詳注』巻一）に「書を読みて万巻を破り、筆を下せば神有るが如し」とあるように、作品の出来映えが神霊の助けを得たように優れていることを指す。

驊騮老大　「驊騮」は、駿馬の名。「老大」は、年をとること。杜詩に八例みられ（『全唐詩索引　杜甫巻』中華書局、一九九一年による）、これらは、例えば「男児功名の遂ぐるは、亦た老大の時に在り」（「送高三十五書記十五韻」0058『詳注』巻二）のように主に人に対して用いるのが一般的だが、「老大の藤に惆悵し、屈蟠（根が屈曲した老木）の樹に沈吟す」（「西枝村尋置草堂地夜宿賛公土室二首」其一0308『詳注』巻七）のように、植物に対して用いられることもある。

騕褭　駿馬の名。「騕褭」については、本篇末尾の〔注〕を参照。孔融「薦禰衡表」（『文選』巻三七）に「飛兔・騕褭は、絶足奔放にして、良・楽の急く所なり」とあり、その李善注に「呂氏春秋に曰く、飛兔・騕褭は、古の駿馬なり」と記されている。宋本は「裊」を「褭」に作る。

清新　韓幹の絵が清々しく新鮮なこと。杜甫「春日憶李白」（0028『詳注』巻一）に、その詩を褒めて「清新なるは庾開府、俊逸なるは鮑参軍」と記す。

魚目〜　「魚目」も「龍文」も駿馬の名。『漢書』巻九六下・西域伝賛に「蒲梢・龍文・魚目・汗血の馬　黄門に充てらる」とあり、その顔師古注に「孟康曰く、四は駿馬の名なり」とある。「瘦脳」は、従来の作品にも見えない語句。北魏・賈思勰『斉民要術』巻六、養牛馬驢騾の「馬を相るに頭より始む」にみえる「頭の高峻を得んと欲するには、削成するが如くす。頭の重からんと欲し、宜しく肉を少くすべきには、兎頭を剥ぐが如くすべし」というような記述が意識されたものであろう。馬の相に

関しては細身のほうがいいということか。「長身」は、馬の立派な体軀。

白肉　太ももの内側の白っぽく見える肉。『礼記』檀弓上に「圉人（馬丁）馬を浴するに、流矢の白肉に在ること有り」とある。その鄭玄注に「白肉は、股の裏の肉」とあり、孔穎達疏は「白肉は、股の裏の肉と云うは、股の裏の白きを以ての故に之を白肉と謂う、肉の色の白きを謂うに非ず」と記すが、杜甫は文字通り「白」の意味で解し、雪と関連づけている。

蹙　ちぢこませる。

蘭筋　馬の目の上にある筋の名。この筋があると千里を駆けることができるという。陳琳「為曹洪与魏文帝書」（『文選』巻四一）に「蘭筋を整え、勁翮（強い翼）を揮い、陵厲清浮（高く見事に飛ぶ）、顧盻千里なる（誇らかに千里を走る）に及ぶ」とあり、その李善注に「相馬経に云う、一筋　玄中より出ず、之を蘭筋と謂う。玄中は、目の上陥むこと井の字の如し。蘭筋の豎つ者は千里す」とみえる。

徐本、高本は「蘭」を「闌」に作る。

〔二〕

逸態蕭疎、高驤縱恣。四蹄雷雹、一日天地。御者閑敏、去何難易。愚夫乘騎、動必顛躓。

逸態蕭疎にして、高驤縱恣たり。四蹄雷雹のごとく、一日に天地す。御する者閑敏なれば、去くに何ぞ難易あらん。愚夫乘騎すれば、動くに必ず顛躓す。

馬の美しくすぐれた姿は何にも束縛されず自由で、飛び跳ねる姿も力強く奔放だ。四つの蹄は雷や雹のように音を轟かせ、一日で世界を駆け巡ってしまう。この馬に対して騎手が落ち着きながらも俊敏に手綱をとれば、どこへ行くにも何の困難もない。逆に馬を知らない素人が騎乗すれば、馬が動いただけで必ずやつまづくことになろう。

逸態蕭疎　「逸態」は、美しくすぐれた馬の姿。張載「七命」（『文選』巻三五）に、「天驥の駿、逸態超越たり」とみえる。「蕭疎」は、何にも拘束されず自由なさま。双声語。杜詩には四例みえ、例えば「雲天猶お錯莫、花萼尚お蕭疏」（「遠懐舍弟穎観等」1290『詳注』巻二一）

のように用いられている。

高驤縱恣　「高驤」は、馬が飛び跳ねること。西晋・傅玄「乘輿馬賦」（『全晋文』巻四六）に「首を延して高驤し、足を擢して軒跱す（そびえ立つ）」とみえる。「縱恣」は双声語で、力強く奔放なさま。杜詩には「送顧八分文学適洪吉州」（1342『詳注』巻二二）に「子（顧戒奢）は干む東の諸侯に、勧勉して縱恣を防がしめよ」と一例だけみえる。

雷雹　馬の蹄の音が、雷が落ち雹が降りしきるように、大きく速く激しく鳴り響くこと。顔延之「赭白馬賦」（『文選』巻一四）の、赤白まだらの馬を描いた箇所に、「玄蹄を経て雹のごとく散じ、素支を歴て冰のごとく裂く」とみえる。李善はこの箇所に「玄蹄は、馬蹄なり。素支は、月支なり、皆射帖（まと）の名なり。言うこころは馬　既に良く、射る者亦た中るが故に玄蹄雹のごとく散じ、素支は冰のごとく裂くるなり」と注している。「雹散」は、良馬が、あられがふるときのような音を立てて駆け抜けていくことを表しているだろうから、「赭白馬賦」とは意味合いは異なっていよう。

閑敏　心は落ち着いているが動作は俊敏であること。この句は『列子』湯問の「造父の師を泰豆氏と曰う。造父の始めて従いて御を習うや、執礼甚だ卑し……泰豆歎きて曰く、子は何ぞ其れ敏なるか。之を得ること捷きかな。凡そ御する所の者は、亦た此くの如きなり」を踏まえていよう。また「閑敏」は、嵇康「琴賦」（『文選』巻一八）にみえる「是に於いて器冷かに絃調い、心閑にして手敏し」からなる語句。

英華は「閑」を「開」に作り「集作閑」と記す。徐本は「閑」を「閒」に作る。

去　英華は「集作云」と校記する。

愚夫　馬の扱い方を理解していない素人。

顛躓　つまづく。失敗すること。杜詩には「越に適きては空しく顛躓し、梁に遊びては竟に慘悽たり」（「奉贈太常張卿垍二十韻」0112『詳注』巻三）など、二例みえる。

〔三〕

瞻彼駿骨、實惟龍媒。漢歌燕市、已矣茫哉。但見駑駘、紛然往來。良工惆悵、落筆雄才。

彼の駿骨を瞻れば、実に惟れ龍媒なり。漢歌燕市、已んぬるかな茫なるかな。但だ見る駑駘の、紛然として往来するのみなるを。良工惆悵として、落筆雄才たり。

ここに画かれている駿馬の骨をよくみると、確かにこれは龍のとりもちである天馬にほかならない。とはいえ漢の歌である「天馬歌」も、燕の昭王が手にした駿馬の骨も、遠い過去のものとなりかすんでしまった。今はただ駄馬が入り乱れ行き来するのを目にするだけになってしまった。そのことを韓幹のような優れた絵師は悲しく感じ、その結果描かれた馬の絵は、才能が開花した素晴らしい出来映えなのであった。

駿骨〜　「駿骨」は、駿馬の骨。転じて駿馬。孔融「論盛孝章書」（『文選』巻四一）にみえる「燕君　駿馬の骨を市うは、以て道里を騁せんと欲するに非ず、乃ち当に以て絶足を招くべければなり」に由来する語句。「龍媒」は、龍が来るきざし、転じて天馬のような駿馬を指す。『漢書』巻二二・礼楽志に載る「天馬歌」にみえる「天馬の徠たるは、龍の媒、閶闔に游び、玉台を観ん」からなる。杜詩には「駿骨」と「龍媒」とが対になった例として、「能く駿骨を市うもの有らば、龍媒の少なきを恨む莫からん」（「昔遊」0954『詳注』巻一六）がある。英華は「惟」を「維」に作る。

漢歌燕市　「漢歌」は、前注に引いた「天馬歌」を指す。「燕市」は、「隗より始めよ」という成語として著名な、燕の昭王が駿馬の骨を買った故事を踏まえる。『戦国策』燕策一には、千金の馬を手に入れようとした君主に対する涓人の言葉が、「死馬すら且つ之を五百金に買う、況んや生馬をや。天下必ず王を以て能く馬を市うと為さん、馬今ち至らん」と記されている。宋本、徐本、高本、張本は「歌」を「謌」に作る。

已矣茫哉　駿馬に溢れていた時代が、遠い過去のものになってしまったことを歎くことば。朱本、仇本は「茫」に「一作亡」と校記する。

駑駘　駄馬のこと。宋玉「九弁」其五（『文選』巻三三）に「騏驥を却けて乗らず、駑駘に策ちて路を取る。当世豈に騏驥無からんや、誠に之を能く善御する莫し」とある。杜詩には五例みえ、例えば「遣興二首」其二（0278『詳注』巻七）に「君看よ渥洼の種（西域の渥洼産の名馬）は、態は駑駘と異なれり」というように、駿馬と対比されている。

紛然　入り交じって乱れているさま。

良工惆悵　「良工」は、腕の良い職人。底本の注は韓幹を暗示するといい、「二句は上の句をうけて優れた馬は自

分を理解してくれるものに遇うのが困難であり、凡庸な人だけが多く入り乱れ、才能のある人物を歎き悲しませることを言う」と述べる。「良工」は、杜詩に二例みえ、例えば「枯柟」（0504『詳注』巻一〇）に「良工（木を活かす人物のたとえ）は古昔少なく、識者は涕涙を出す」とある。「惆悵」は、悲しむさま。双声語。

落筆雄才　「落筆」は、筆を下ろすこと。ここでは韓幹が絵を描くこと。「落筆」は杜詩に三例みえ、例えば「八哀詩　贈左僕射鄭国公厳公武」（0946『詳注』巻一六）に、「書を閲しては百氏を尽くし、筆を落しては四座驚く」と用いられている。この例のように、詩文を記すことに使われ、絵筆を下ろす意味としては、この讃にだけ用いられている。「雄才」は、すぐれた才能。杜詩には一例みえ、「冬到金華山観、因得故拾遺陳公学堂遺跡」（0587『詳注』巻一一）に「悲風我が為に起き、激烈にして雄才（突出した才能をもつ陳子昂）を傷む」とある。

〔注〕

穆天子傳、飛兔・驥褭日馳三百里。

穆天子伝に、飛兔・驥褭は、日に三万里馳す、と。

『穆天子伝』には、「飛兔・驥褭は、一日に三万里も走る」とある。

穆天子傳～　『芸文類聚』巻九三（獣部上、馬）所引の『穆天子伝』に「天子の八駿、赤驥・盜驪・白義・踰輪・山子・渠黄・華騮・緑耳」とあるが、「華騮」がみえるのに対し、「驥褭」はみえない。また現在通行している『穆天子伝』にこの記述はない。

徐本、高本、張本は「穆天子傳」の前に「公自注」の三字を記す。徐本、銭本は「兔」を「兎」に、「百」を「萬」に作る。高本は「兔」を「免」に、「百」を「万」に作る。高本、銭本ともに「褭」を「裹」に作る。前注の「驥褭」も参照。

附記：本稿はJSPS科研費 JP21K00321・JP19H01230の助成を受けたものである。

（北海道教育大学旭川校）